4-⑧ 巡礼者は進む

＜巡礼者は進む＞

-驚異の世界を垣間見て

ジョン・バンヤンの『天路歴程』は面白い読み物であると同時に霊的・心理的洞察につらぬかれた古典文学である。この物語は、一切を薬てて危険な旅立ちをし、美の都"へ着くクリスチャンという人の冒険の話である。彼

1パースティション（迷信）、鶴善的なトーカティブ（饒舌家）、おそろしいジャイアント・ディスペ

ア（巨きな絶望）など。彼はまた歯難の丘"屈辱の谷"'"自惚れの国"などにぶつかる。

だが敢なとの巡礼者は着実に進む。すとしずつ、ひとつひとつ、障碍は彼の背後に落ち去っていく。幾多の恐怖、失敗にもかかわらず、彼は挫けずに旅をつづけ、ついに夫の都"に着く。

この寓意物語では、苦難と危機とはクリスチャン自身の内なる心理状態を暗示している。バンヤンは、あらゆる宇宙巡礼者がいかに敢に旅立ちをし、内なるネガティブなものを克服しなければならないか、そして内なる洞察

スーパーマインドの採求を志すわれわれの理解を助けるため、ここにクリスチャンの経験した二つの冒険を見てみよう。

クリスチャンとその道伴れのホープフル（有望）とは、ある川べりにんで、打ちひしがれている。この道は荒れてごつごつしていた。二人はもっとらくな径はないかと思った。見回わすと、ある牧場と平行して走っている小

小径は初めこそ歩きやすかったが、そのうちにだんだん唆くなってきた。それもその筈、間違った経だったのだ。嵐のなかで二人は径に迷い、転びつまろびつ術徨ううちに、ようやく避難小屋をみつけ、そこで眠った。翌朝

ここで二人はあれこれとじっくり思考を巡らす。クリスチャンは真実の径をてて、楽な径と見えた小径を採った自分の愚かさを認める。そしていま、彼は彼自身の愚行から逃れて物事を正しく遂行しようと決心する。彼の衣

とするとこれは、あらゆる霊的な巡礼の旅が成功するという示唆に富む物語である。われわれの間違いによって、われわれは心理的な牢獄へ投げまれる。だが内なる鍵によって、われわれはこの牢獄を脱出し、巡礼の旅を続

もうひとつの冒険は、ディレクタブル・マウンテンズ（愉しい山）で起こる。クリスチャンとホープフルはナレッジ（知識）、エクスペリエンス（経験）、ウォッチフル（見張っている）、シンシア（真摯な）という名の四

示唆されているとおり、どんな辛抱づよい巡礼者も休養を受けいれ、驚異の世界を垣間見て、愉快に旅をつづけていくのである。

Revision #2
Created 18 October 2024 02:40:37 by ゆう
Updated 27 October 2024 05:49:59 by ゆう